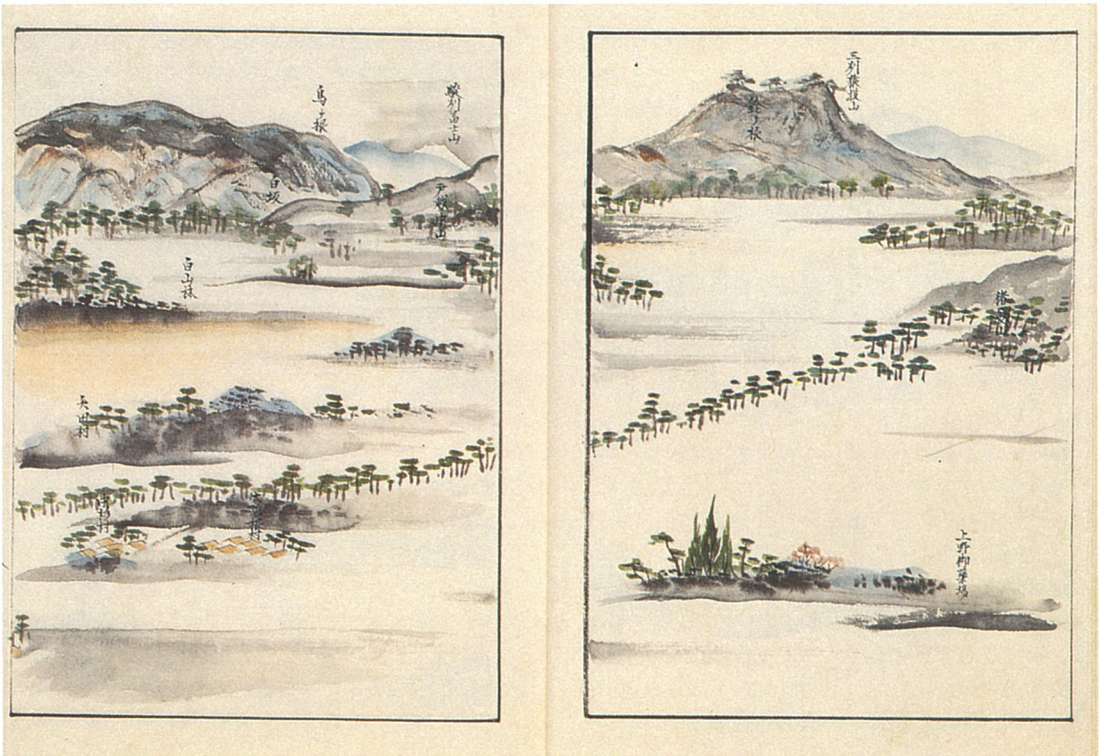


蓬左

HÔSA No.41

名古屋市蓬左文庫
Nagoyashi Hôsabunko

1990. 4



金城温古録第十五冊 御天守編之七 図彙部 遠見絵巻物 1冊
奥村得義編 安政5～万延元年写 (31.0×21.4cm)

奥村得義(1793～1862)が著した「金城温古録」の内御天守編全7冊の最終冊に収録された絵巻の一部。この絵巻の原図は、尾張藩九代藩主宗睦(1733～99)の弟勝長(1737～1811)が、天守から四方をながめ目に入る風景を画工岩井正齋に命じて描かせたもの。得義は、天保12年(1841)冊子本の形に写し、本図はさらにそれを清書したもの。

これは、東を望んだ部分にあたり、近景に大曾根村・矢田村(現東区)、中杉村(北区)の集落、上野薬場(煙硝蔵・現千種区)、猪越(猪子石・現名東区)へ通じる街道の松並木、遠景には、猿投山、さらに富士山の姿までが描かれている。

「金城温古録」は、凡例編・御天守編・御本丸編・御深井丸編・二之丸編・御城編・御深井御庭編・三之丸編・拾遺編の9編からなり、絵図類なども数多く収録、当時としては収集しうる限りの資料を考証して著述された64冊におよぶ大著である。

～(1)奥村得義と金城温古録～

徳川幕府の開設から 200 年余、大きな時代の変革が近づいていました。ここ尾張藩の人々も、それぞれに時代の変化を感じとっていたと思われます。今回と次回の 2 回は、こうした時代に生きた人々の蔵書を通して、幕末の尾張藩の一側面を御紹介します。

「尾張名古屋は城でもつ」と古くから知られた名古屋城、この城に興味をもったものなら素人の好事家からその道の研究者まで必ず目を通すことになるのが「金城温古録」です。9 編 64 冊からなる本書は、長期にわたる資料収集と実地調査の上になつて、名古屋城についての知りうる限りの正確な事実を記録にとどめようと奥村得義がその半生をかけて編集した大著であり、現在にいたるまで、これ以上に名古屋城の全体を網羅し詳述したものはまだありません。

奥村定兵衛得義は、藩士としては下級に属し、城代配下の掃除御中間頭を勤めていましたが、名古屋城の調査を命ぜられたのをきっかけに、死の直前まで 40 年間におよぶ「金城温古録」の編纂にとりくむこととなりました。

下級とはいえ、もともと奥村家は学問熱心で、彼も若い頃から和歌や故実を師について学んでおり、すでに相当な蔵書もあったと思われますが、この執筆のために収集した書物は数百冊におよんだと推定されます。これらは、城内や尾張藩内部の事柄など当時としては、藩の機密事項にかかわるものが多く、彼はこれに「国秘録、(国＝尾張藩の国外秘の記録という意味)」という叢書名をつけて所蔵していました。

また、こうした書物の購入、筆写料、紙や墨の代金なども並大抵でなく、職務のかたわら、手習の塾を開設して、子供に読み書きを教えていました。

得義には、いまひとつ「松濤棹筆」という全 85 冊の膨大な記録があります。これは、他の著作や記録からの抜き書きや、伝聞、自らの見聞などを書きとめて編集した、多種多様な内容の随筆とも雑記録ともいふべきものです。この内の三分の一が「海港新制録」と名づけられており、ペリーの来航にはじまる幕府諸藩の動揺を中心に、これと相前後して発生した洪水・地震の記録が収められています。この序文に得義は、「一前略一天保の中頃、イギリス清国に乱入せしより以来、四夷、本朝に心ヲ懸る事の始よりして本朝も又古制を換えらるゝ迄に及ふの事跡、粗其便宜を求て写し集しもの也。一中略一其間、天変地妖悉預らざる事なし。稍や、安政の初に至て事定りたり。其年間凡十二年計り也。能思へハ夷狄起て却て本邦御泰平の睡を覚すなるへし一後略一」と記しています。時に得義 63 才、執筆が大詰に入るなか、世の中の動きを敏感に受けとめ、冷静に見つめている知識人奥村得義の姿を見ることが出来ます。

得義の編集執筆の助手を勤めた養子友次郎(後の奥村定氏)は、後年生前の彼の日常を次のように語っています。「面貌稍長くして眉太く、二かは眼のぱっちりとしたる、身長 5 尺 7 寸、体重 20 貫程もある偉丈夫にして、文武を兼備せり。管に手蹟の見事なるのみならず、絵画および和歌を嗜めり。一中略一酒も飲まず、煙草を喫せず。あいだにちょこちょこ菓子を食するのみにて、其の他は弟子を教へ読み且つ書くを常とす。其の机に対ふや、昼はいふに及ばず。夜も筆もつたるまゝにて、家族すら其何時ねむられるかを知ること稀也。何でも見たく読みたく書きたきが病にして、その根気の強きこと実に驚くに堪えたり一後略一」(新愛知新聞明治 42 年 11 月 27 日)

文久 2 年、彼は、維新の大変革を見ることなく、残りの「金城温古録」の清書を友次郎に託してこの世を去りました。



「松濤居」



「松濤居図書印」
(各々原寸)



「松濤居図書印」



手習を教える奥村得義 (新愛知新聞 M42. 11. 27)

金城温古録の成立とその諸本について

文政4年(1821)、奥村得義が、名古屋城についての記録編纂を思い立ってから22年、資料の収集、構想をへて、執筆を開始したのは天保13年(1842)の春であったという。それから16年、安政5年(1858)に細野要齋が前半の4編分の校閲を行った時には、草稿についてはほぼ全編分が完成していたと見られる。さらに2年後、万延元年(1860)、要齋の校閲を終えた4編31冊が「金城温古録」として藩に献上された。得義が没したのは、その2年後、その時には、残り5編についても大方が清書を終えていたらしい。遺言により、養子友次郎が得義の死後全編の清書を完成したが藩へ献上されることはなかった。これらの草稿や清書は、友次郎死後散逸したが、現在は、尾張徳川家の蔵書を受けつぐ当文庫に伝わる献上本と合わせ、東洋文庫と当文庫に各々一セットが所蔵される形となっている。

- (1)東洋文庫本 9編64巻54冊
 凡例編・御天守編・御本丸編・御深井丸編 天保13～安政5年 得義自筆草稿本 31巻31冊
 二之丸編・御城編 安政5～文久2年ごろ 得義・友次郎筆清書本 18巻10冊
 御深井御庭編・三之丸編・拾遺編 天保13～文久2年ごろ 得義自筆草稿本 15巻13冊
- (2)蓬左文庫本 9編65巻65冊
 凡例編・御天守編・御本丸編・御深井丸編 安政5～万延元年 奥村得義・友次郎筆清書本 31巻31冊
 二之丸編・御城編 天保13～安政5年 奥村得義自筆草稿本(「愛知県図書章」の印アリ) 19巻19冊
 御深井御庭編・三之丸編 安政5～明治初年 奥村友次郎清書本 12巻12冊
 拾遺編 文久2～明治初年 奥村友次郎校訂、同筆清書本(二の丸編以下同装丁) 3巻3冊
- (3)名古屋城本 4編31巻31冊
 凡例編・御天守編・御本丸編・御深井丸編 明治初～20年ごろ献上本(現蓬左文庫本の一部)写カ
- (4)宮内庁書陵部本 4編31巻31冊
 同 明治～昭和初年ごろ 名古屋城本写カ
- (5)名古屋市鶴舞中央図書館本 9編64巻56冊
 明治42年6月、名古屋市史資料として、奥村定(友次郎)氏によって、筆写、校合、装丁が完成。底本は、同氏所蔵本(現東洋文庫蔵本と現蓬左文庫本の一部)

年号	奥村得義年譜	世相	年号	奥村得義年譜	世相
寛政5 1793	8.18 誕生		13	50才	2 城代玉置小平太へ草稿の一部を提出
12	8才				この年より執筆を開始
文化元 1804	12才				友次郎養子となる(7才)
2	13才		弘化元 1844	52才	御徒格となる
5	16才		2	53才	10 城代肥田孫左衛門へ稿を提出
6	17才	8 フェートン号事件	3	54才	閏5 養子友次郎掃除御中間頭勲方見習
8	19才	4.7 父為綱没(53才)、家督相続	嘉永2 1849	57才	
	6 御善請方手代並、切米7石2人扶持		6	61才	師竹村通央没、蔵書を購入
11	22才	11 御善請奉行手付吟味方本役、2石加増	安政元 1854	62才	2 勤続多年につき金壹両下付
文政3 1820	28才	12 掃除御中間頭並	4	65才	書名を「鶴城亀目俚言集」とする
4	29才	この頃名古屋城の調査を命ぜらる	5	66才	6.10～11.5 細野要齋4編までを校閲、「金城温古録」と命名
7	32才	1 掃除御中間頭本役、加増1石加扶持1人分			7 新藩主の諱をさけて徳義(のりよし)を得義(かつよし)と改める
9	34才	9 手習の塾を開く	万延元 1860	68才	10.22 「金城温古録」5編31冊を城代滝川又左衛門を通して藩へ献上
10	35才		文久元 1861	69才	11 友次郎、加扶持2人分
天保3 1832	40才	喜佐を娶る	2	70才	12.6 御広敷御用達格。1石加増、御掃除御中間頭はそのまま
4	41才	4.7 母元没(64才)			7 将軍の上洛にそなえ、城代滝川よりの本丸についての質疑に答える
4～5					7.25 正午没
6	43才				
7	44才	9.1 弟の孫友次郎誕生			
8	45才				
10	47才				
11	48才				
12	49才	2 石加増			
		天保飢饉			
		4 美濃、万寿騒動			
		9 三河、加茂一揆			
		2 大塩平八郎の乱			
		3 12代藩主斉荘、相続をめぐる藩内二分す			
		アヘン戦争			
		5 幕府、天保改革			
					8 13代藩主慶藏
					6 14代藩主慶恕
					6 ベリー浦賀来航
					3 日米和親条約
					4 日米修交通商条約
					7 安政大獄
					15代藩主茂徳
					10 14代将軍家茂
					3 桜田門外の変
					9.4 慶恕幽閉を解かれ慶勝と改める
					1 坂下門外の変
					2 和宮降嫁
					6 一橋慶喜将軍後見職

蔵書にみる幕末の尾張藩～(1)奥村得義と金城温古録～展示目録

—著作—

1. 金城温古録 65巻65冊
奥村得義
天保13年～明治初年奥村得義・友次郎写
2. 金城温古録(名古屋市鶴舞図書館蔵) 64巻56冊
同 奥村定校 明治42年写
3. 松涛棹筆(抄)(同) 17冊
同編 明治年間末名古屋市史編纂室写
4. 太平談(同) 2巻2冊
同編 天保8年序 同室写
5. 正房雑集(同) 1冊
同 江戸末期写(自筆)
6. 松涛歌稿(同) 2冊
同 江戸末期写(同)
7. 棋殺生垣御掃除方支配相成候以来之一条(同) 1冊
同 明治43年名古屋市史編纂室写
8. 御城郭略図解(名古屋市博物館蔵) 5枚
同 文久2年写(自筆)

—蔵書—

9. 国秘録・宇治茶進献一条留 1冊
江戸末期写
10. 国秘録・江戸御在府中御途中御会釈留 1冊
嘉永7年写
11. 国秘録・御代初御祝御能御賄 2冊
江戸末期写
12. 国秘録・御天守御修復留(名古屋市鶴舞中央図書館蔵) 3冊
弘化3年奥村得義奥書
明治年間末名古屋市史編纂室写
13. 国秘録・御天守鯨鱗純金文政以後下品に相成候分(同) 1冊
文久元年奥村得義奥書 明治42年同室写
14. 国秘録・尾州御大敷御役附之 大抵(同) 1冊
天保14年奥村得義奥書 明治年間末同室写
15. 国秘録・御勝手改革一条 1冊
江戸末期写
16. 国秘録・尾張諸臣十二格之事 1冊
嘉永7年写
17. 国秘録・亀山志 3巻2冊
安政6年写
18. 国秘録・御勘定奉行元方古文格(同) 1冊
奥村仁右衛門元僑 弘化3年奥村得義奥書
明治44年名古屋市史編纂室写
19. 国秘録・国城経営図記・付図(同) 1冊1枚
天保7年奥村得義奥書 明治42年同室写
20. 国秘録・御普請奉行石場役・往還方手控(同) 1冊
明治44年同室写
21. 国秘録・御用部屋行事(同) 3冊
明治42年同室写
22. 国秘録・千石以上伊呂波附 2冊
安政5年写
23. 国秘録・大道寺侯家秘録(同) 1冊
弘化3年奥村得義奥書
明治44年名古屋市史編纂室写
24. 国秘録・難波の塵(同) 6冊
竹中彦右衛門
文久元年奥村得義奥書 明治44年同室写
25. 国秘録・隼人正殿病中御尋同葬事等 1冊
安政4年写
26. 国秘録・明倫堂始原 1冊
江戸末期写

27. 国秘録・柳営御役座順 1冊
安政2年写
28. 元禄10年名古屋城絵図(同) 1枚
大正2年名古屋市史編纂室写
29. 万治年間之名古屋図(名古屋城振興協会蔵) 1軸
写
30. 昔咄(名古屋市鶴舞中央図書館蔵) 12冊
近松茂矩 天保7年
31. 温知政要(同) 1冊
徳川宗春 嘉永2年奥村得義写
32. 古渡志(同) 1冊
渡辺澄政 江戸末期写
33. 稽徳編付録(同) 1冊
嘉永元年奥村得義写
34. 鸚鵡籠中記(抄)(同) 5冊
江戸末期水野正信写
35. 青標紙(同) 8冊
大野広城 文久元年写
36. 柳営秘鑑 10巻5冊
菊池政門編 天保7年写
37. 武家諫懲記 3巻3冊
弘化3年写
38. 金府紀較 2冊
文久元年奥村友次郎・水野正信写
39. 尾陽寛文記 1冊
天保14年水野正信写
40. 尾張国御法度之古記 1冊
江戸末期写
41. 水府御訓 2冊
天保5年奥村得義写
42. 小笠原長昌覚書 1冊
小笠原長昌 江戸前期写(自筆)
43. 同 1冊
同 天保11年小寺玉晁写
44. 同 1冊
同 江戸末期水野正信写
45. 尾州古城志 1冊
長坂政賢補訂 天野信景校
天保6年奥村得義写
46. 寛永御上洛記 1冊
天保7年奥村得義写
47. 瑞龍公御治世記 2巻2冊
天保6年奥村得義写
48. 尾張大根 2巻1冊
天保13年水野正信写
49. 義家朝臣鎧着用品次第 1冊
江戸末期写
50. 武家装束抄 1冊
文政9年竹村通典写
51. 名城古事録 1冊
弘化2年奥村得義写

—伝記資料—

52. 藩士名寄 第27冊 1冊
江戸末期写
53. 葎の滴 感興漫筆 卷11-20(鶴舞中央図書館蔵) 10冊
細野要斎
江戸末期写
54. 葎の滴 感興漫筆 卷21.26.29.30.31冊(同) 10冊
同 明治年間末名古屋市史編纂室写

9. 名古屋叢書の思い出(2) (「名古屋叢書三編だよりNo.17・19」より再録)

叢書の刊行が具体化したのは、昭和33年の秋ごろです。刊行を促す声も多く、新聞などでもとりあげられたのですが、市当局がなかなか刊行を決定しませんでした。現在、三編の編集委員である林董一氏も刊行推進の一文を新聞に発表して下さった1人でした。

当時の名古屋市長小林橘川氏自身も、名古屋叢書については、積極的賛成ではなかったようですし、とにかく市の上層部にとっては、名古屋叢書などには、あまり関心がなかったようです。むしろ、教育委員会が熱心で、当時文庫が属していた社会教育課あたりが中心になって推進していました。

結局、市議会の中に強力な推進派が現れたこともあって、市制70周年の記念事業の1つとして刊行が決まりました。そして、昭和34年の新年度から、蓬左文庫を事務局として、刊行事業が始められ、三編まで含めると30年におよぶ私と名古屋叢書とのつきあいがスタートすることになりました。

編集委員は、戦前からの委員、尾崎久弥、佐々木隆美、山田秋衛の各先生、参与だった所三男先生、そして名古屋叢書の主ともいべき元編集室主任市橋鐸先生の5人をお願いしました。大かたの方とは以前からのおつきあいもあり、名古屋に来てからは、みなさん蓬左文庫の常連でもありましたが、佐々木先生とは、それまであまり面識がなく、あらためて、御宅まで御挨拶にうかがった記憶があります。どちらにしても、皆さん名古屋叢書については私よりベテランばかりでしたので、まずは安心してはじめることができました。

とくに市橋先生は、昭和16年の編纂開始から24年の閉室まで、名古屋叢書とともに歩まれ、未刊のまま中断した経験をお持ちなのに、その情熱はたいへんなものでした。山田先生は温厚な方で、一番年長でもあり、いつも座長格を勤めていただきました。先生はもともと土佐派の画家で、文庫にも北条実時の書齋を描いたものがあります。

すでに原稿があるとはいえ、分類・整理されてから10年近くたっているため、まず原稿全体の検討が行われ、大部なものは一時的に保留されることになりました。残ったものの内、宗教編に分類されていたものは削り、さらに新しい資料も加えて、10編25冊に145件の資料を収録して、年5冊、5ヶ年で完了する計画が決まりました。と



昭35年6月10日地理編「金鱗九十九之巖」の調査、含笑寺前で、左から竹田印刷渡辺氏、市橋先生、筆者

くに尾崎先生には、御自身の所蔵資料から、数多く新しく収録に加えていただきました。

新しく収録を決めたものは、原稿から作らねばなりませんでしたが、すでにあった原稿でも、ずいぶん手を入れたり、はじめから書き直したものもあります。ですから、年5冊刊行というのは、いま考えるとずいぶん無謀な計画だったと思います。

最初に音をあげたのは、印刷所でした。この時も市の用度課を通して依頼したのですが、用度課の方針で、一つの叢書なので、全巻一つの印刷所にやらせることとなりました。竹田印刷に決まりましたが、当時は、現在のように写植ではなく、すべて活字をひろう作業からはじめねばなりませんし、名古屋叢書は、ことばも、字もむずかしいものが、1ページにぎっしりつまっていますので、こんなに手間のかかるものを年5冊もひき受けたのでは、機械のやりくりもたいへんで、採算が合わないと言っていました。

織茂三郎談(元蓬左文庫調査研究員)

出版物一覽

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S. 50年刊)	3,500円	名古屋叢書三編 全19巻20冊(S55~63年刊)各3,000円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S. 51年刊)	4,000円	1. 尾張徳川家系譜
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(同)	2,500円	2. 尾藩世記 上
尾崎久弥コレクション目録第一~三集	各 1,500円	3. 同 下
名古屋叢書(正編)索引・総目録(S. 53年刊)	2,000円	4. 士林派洞統編
名古屋叢書続編 索引(S. 47年刊)	700円	5. 尾張年中行事絵抄 上
名古屋叢書続編総目録(S. 44年刊)	400円	6. 同 中
善本解題図録第一~三集(S. 55年再版)	各 300円	7. 同 下
蓬左文庫・源氏物語図録(S. 53年刊)	300円	8. 張州年中行事鈔・尾張俗諺・尾張童遊集
蓬左文庫所蔵古地図複製 No.1~No.15(S. 55~61年刊)	各 1,800円	9. 松涛棹筆(抄) 上
1. 尾府名古屋図	2. 尾州名古屋御城下之図	10. 同 下
3. 名古屋図	4. 尾張八郡図	11. 楽寿筆叢・十如是独言
5~15 尾張志付図		12. 葎の滴 諸家雑談・家事雑識
5. 尾張図	6. 愛知郡東	13. 天保会記鈔本
7. 愛知郡西	8. 春日井郡	14. 金明録
9. 智多郡	10. 熱田	15. 尾張方言・水かはり・浪越方言集・宮説言葉の掃溜 雅語訳解・俗語弁
11. 丹羽郡	12. 海東郡	16. 横井也有全集上(発句・和歌編)
13. 海西郡	14. 中島郡	17. 同 中 (俳文・俳論俳話編)
15. 葉栗郡		18. (1) 同 下(1)(連句・漢詩文編)
御本印型書鏡(S. 58年製)	1,000円	18. (2) 同 下(2)(狂歌・談義・伝記資料・追加・参考編)
堀田文庫蔵書目録(S. 58年刊)	500円	19. 物品識名・物品識名拾遺・本草会物品目録・泰西本草名疏
蓬左文庫絵葉書<8枚組>(同)	300円	
蓬左文庫図録(同)	1,500円	
蟹江慶次郎旧蔵書目録(S. 62年刊)	500円	

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

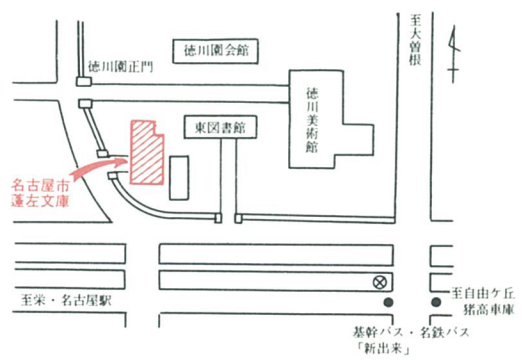
利用ご案内

- ▷開館時間 午前9時30分~午後5時
- ▷休館日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)
祝日(日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
年末年始(12月28日~1月4日)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません
(閲覧料) 普通図書 無料
重要図書 有料(1部350円)
- ▷展示 随時蔵書の一部を展示
(特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 普通図書のうち、保存上影響のないものについて複写サービスを行います。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影の申請を受け付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地
☎(052)935-2173

(名古屋駅から) 市バス(基2)「自由ヶ丘」「猪高車庫」行
名鉄バス「本地ヶ原方面」行
(栄から) 市バス(基2)「引山」「自由ヶ丘」
「猪高車庫」行
「新出来」下車、徒歩4分



「蓬左」第41号 ☆平成2年4月14日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)
☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)

2007